

Title	留学生による方言研究の実践
Author(s)	村田, 真実
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 13, p. 51-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56943
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

留学生による方言研究の実践

村田 真実

【要旨】

本稿は、今学期から新設された研究科目「日本語学研究Ⅱ 日本語学研究（方言）」について報告するものである。まず、授業の目標、授業スケジュールを紹介する。そして、スケジュール通りに行かなかったことも踏まえて、実際の授業内容について報告する。本科目では、方言調査の手法を実地で学ぶために2日間のフィールドワークを設け、質問紙による面接調査と自然談話を録音する調査を行った。実際に調査を行ってみると、日本語方言学者であるグロータース神父（ベルギー）のことばの通り、「外国人が日本語方言を調査することの困難さ」を痛感した。方言話者は、調査員である留学生を目の前にすると、方言が出にくくなる。今回の調査でもその傾向が見られた。これに対して、授業最終回で受講生が答えたアンケート結果も踏まえ、留学生が日本語方言を研究するときにどんな困難があるのか、それはどうやって解消すべきなのか、検討する。

1. 本授業の目標

研究科目「方言研究の実践／Practical dialectology」は、授業の目標として下記の4点を設定している。講義科目ではあるが、フィールドワークを行うため、少人数制の演習のような形で実施した。

- ①方言調査の基本的な手法を学ぶ。
- ②フィールドワークを通じて、実際に話されている大阪方言を記述する。
- ③集めたデータを分析する手法を身につける。
- ④大阪方言に限らず、日本語諸方言について基本的な知識を身につける。

2. 授業のスケジュールと評価、履修要件

全15回の授業のうち、シラバス作成の段階で、本授業の半学期間のスケジュールは下記のように設定した。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. ガイダンス2-6. 日本語諸方言について・方言調査のやり方・方言調査の準備7. 中間発表8. フィールドワーク①（方言調査）9. フィールドワーク②（方言調査）10-13. 日本語諸方言について・調査結果の分析14. レポート提出15. レポート返却 |
|---|

前半の授業では、日本語諸方言について基本的な知識を身につけること、方言調査のやり方を学ぶこと、実際に自分たちで方言調査を行う準備（調査票作り、ICレコーダーの使い方、調査の練習など）をすることの3つの作業を並行して行うこととした。しかし、実際には想定した以上に調査票作りに時間がかかり、他の2つの作業に割ける時間は少ししかなかった。それでも、日本語諸方言に関心の高い受講生が揃っていたので、「言語と方言の違いは何か」「上位区分の方言と、下位区分の方言で、学術用語として別の用語がないのは不便ではないか」など、学生からの主体的な質問があり、方言学を学ぶ上で必要な議論が出来た。方言調査のやり方は、小林／篠崎編（2007）をテキストに、話者に対する振る舞い方や礼儀、個人情報の扱い方などから始まって、調査の方法の種類、知りたいことを実際に調査項目にするときの注意点などを解説した。

中間発表の時間は、学生が作成した調査票の内容を発表するものとし、実際に調査を行う際の注意喚起や、学生同士の意見交換会の場として設定した。中間発表については、調査票を作成する際の注意点に留意し、実際に即した調査票が作成出来ているかと、他の学生の調査票の不備や改善点を上手くアドバイス出来たかという点から評価した。

フィールドワークの機会は2回設けた。フィールドワークの時間には、実際に大阪方言話者と対面し、方言調査を行う。フィールドワークの概要については後述する。フィールドワークの評価は、話者への礼儀を忘れず、意欲的に取り組めたかという点から判断した。

後半の授業では、引き続き日本語諸方言について基本的なことを学びながら、調査結果の分析を行うことにしていたが、調査の分析に多くの時間が必要で、4回分の授業の殆どをそれに費やした。しかし、これは必要なことであったと思う。

フィールドワークで得たデータに基づいて、後半の授業で検討したことを踏まえて、学生には最終レポートを執筆して貰った。レポートは、授業中に紹介した参考文献や先行研究を適切に引用出来ているか、調査の概要をレポートにきちんと記しているか、調査項目に対する分析の方法は適切であるか、各々がしっかり考えた上で書いたあとが見られるか、などの観点から評価した。授業の最終回では、レポートのフィードバックを行った。

授業の評価は、中間発表（25%）、フィールドワーク①（25%）、フィールドワーク②（25%）、レポート（25%）で決めることとした。これはシラバスの履修要件にも書いたが、つまり、フィールドワークに2回とも参加しなかった場合、本授業は不合格となる。フィールドワークを実践する授業なので、この条件を外すわけにはいかなかった。その上、新設科目であるため、受講生の見通しが立たず、受講生があまりに多いと（秋学期の日本語学講義Ⅰは特別聴講生も合わせて30名ほどの受講生があった）フィールドワークの実施が難しくなる怖れがあった。そのため、本当にフィールドワークの手法を学びたい学生にだけ受講して貰えるよう、このような履修要件を設定した。来年度も同じ条件で行うつもりである。

【授業の履修要件と評価】

秋学期の日本語学講義Ⅰを履修していなくても受講出来る。

フィールドワークの機会は2回設けているが、1回も参加しない場合、不合格となる。

評価：中間発表（25%）、フィールドワーク①（25%）、フィールドワーク②（25%）、レポート（25%）

2. 受講生

本授業の受講生は4名であった。

- 日本語日本文化研修留学生2名（タイ、ミャンマー）
- 特別聴講生1名（ベトナム）
- 非正規聴講生1名（イタリア）

3. 調査の概要と改善点

調査の概要は以下の通りである。

調査日：①2014年6月1日（日）10：00－12：00、 ②2014年6月8日（日）10：00－12：00
調査場所：箕面市多文化交流センター
調査員：受講生4名、引率1名
同席者：豊川南小地区福祉会会長、箕面市国際交流協会職員
調査方法：①質問票による面接調査、②自然談話調査
話者：①箕面市小野原生え抜きの方4名（65歳以上の男女） ②箕面市小野原生え抜きの方9名（65歳以上の男女）

箕面市国際交流協会（MAFGA）¹⁾ から全面的にご支援頂き、本調査を行うことが出来た。協会職員の方から豊川南小地区福祉会会長西岡氏をご紹介頂き、小野原生え抜きの話者を集めることが出来た。小野原の歴史（竹やぶからどうやって今のようなお洒落な住宅街になったか、他集落との婚姻関係の風習など）も教えて頂くことが出来た。また、協会から調査場所の提供もして頂いた。

話者の方々は留学生に対して大変理解があり、積極的に調査に対応してくださったので、本当に有難いことだと感じた。ただ、初対面ということ、話者の方全員が方言調査を受けるのが初めてであったこと、そしてやはり留学生への配慮ということも無意識的であったのか、方言形ではなく共通語形が多く出た。この点については、今後調査を行う上で工夫していかなければならない。アンケート結果を見るに、学生にも自分たちが外国人であるために方言形が出なかったのだという自覚があったようである。

2日にわたる調査で、2種類の調査方法を実践することを目標とした。①は質問票を用いた一対一の面接調査である。②は調査員1名が、お互いをよく知っている話者同士2名の会話を録音するものである。調査員は会話に入らず、分からない表現が出た場合にICレコーダーの録音時間をチェックしたり（あとで聞き直すため）、会話が途切れた際にはトピックを提供したりする役割を果たした。

今回2種類の調査方法を実践したが、これは来学期から見直したいと考えている。新設科目設置にあたって、1年しか滞在出来ない留学生に日本の方言学について広く浅く教え、兎に角いろんなことに触れて貰おうと考えていたが、これには再考の余地がある。半学期の授業では、集中的に1つの方法を教えた方が良いのではないか。また、フィールドワークも連続的に行う

のではなく、

1回目のフィールドワーク



授業で結果の検討



2回目のフィールドワークで、1回目の調査で分からなかったことを更に深く追究する

という形にした方が良いように思う。調査をするのが初めての学生にとって、初対面の話者と会話を膨らませていくのは難しいのかもしれない。これは日本語を母語とする者でも難しく感じることで、留学生なら更に困難に思うだろう。この点、配慮が足りなかった。

また、もっと実際的なことで、帰って調べてからでないといけなこともある。たとえば調査項目の(8) 春、野原や山際などに生えるものです。中がすいていて食べると酸っぱい味がします。これを何と言いますか。(共通語形：いたどり)について、話者2名がイッタンドーシと答えた。岸江他編(2009)によると、箕面市の方言で「いたどり」を表すことばは、イタドリまたはイッタンドリといい、イッタンドーシは豊中市の北部で使われている。我々が調査した小野原は茨木市や吹田市に隣接するところで、豊中市とも近いが、イッタンドーシの分布は飛び石的である。この点、受講生の1人が、「もっと詳しく聞きたかったが、調べたあとに聞く機会がなくて残念だった」というコメントを残している。

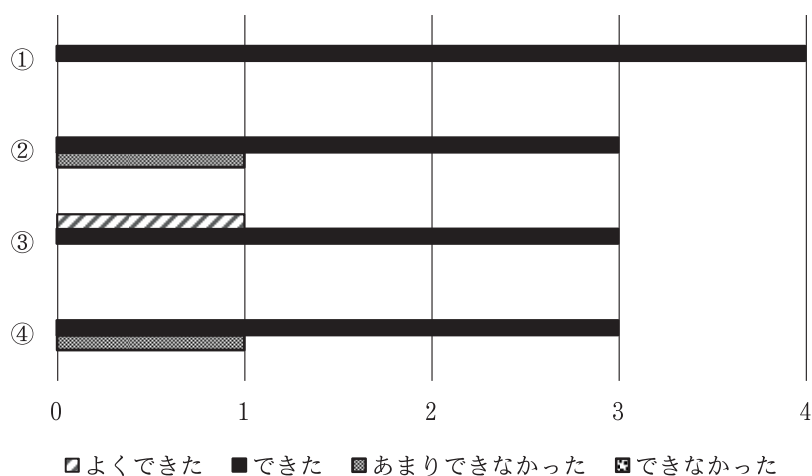
以上を踏まえて、来学期からは、フィールドワークを2回行うのは今年度と同じであるが、内容を変更する予定である。1回目の調査は質問紙を用いて行い、2回目の調査はその補足を行うためのものとする。また、2回の調査は間隔をあけて行い、同じ話者に対応して頂く。多くの手法に触れられなくとも、学生自身が分からないことを、フィールドワークを通じて突き詰めていくという実感を得られるような授業の構成にすることが、半学期間という制限のある中で学ぶ限界ではないだろうか。

4. 授業の達成度と、アンケート結果

授業の最終回で学生に対してアンケートを行った。前述した通り、本授業の目的は以下の4点にあり、これについて学生自身に達成度を自己評価して貰った。回答は「よくできた」「できた」「あまりできなかった」「できなかった」の4択とした。結果は表1の通りである。

- ①方言調査の基本的な手法を学ぶ。
- ②フィールドワークを通じて、実際に話されている大阪方言を記述する。
- ③集めたデータを分析する手法を身につける。
- ④大阪方言に限らず、日本語諸方言について基本的な知識を身につける。

表1：自己評価の結果（単位：人）



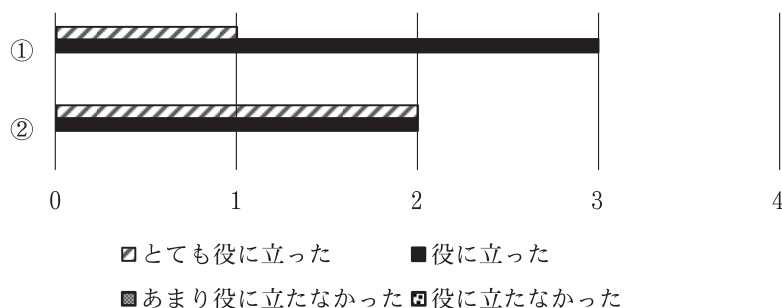
「あまりできなかった」と自己評価した学生については、②の場合、調査で共通語形が多く出すぎたためにこのような評価を下したものと考えられる。④の場合は、教室での授業中に行う予定だった講義が、調査票作りと調査結果の分析に時間を割かれて出来なかったため、このような評価を下したものと考えられる。後者については、秋学期に設定されている研究科目「日本語学研究Ⅰ 日本語学入門（方言）」の授業を履修することである程度カバー出来ると考えられるので、秋学期に引き続いての履修をして貰えるのが一番望ましい。

学生自身の評価だけでなく、講師の行った授業に対する評価にも回答して貰った。回答は「とても役に立った」「役に立った」「あまり役に立たなかった」「役に立たなかった」の4択とした。結果は表2の通りで、全受講生から肯定的評価が得られた。

⑤教室（研究室）で行った授業は、あなたにとって役に立つものでしたか。

⑥フィールドワークで得た経験は、あなたにとって役に立つものでしたか。

表2：授業評価の結果（単位：人）



これに関する具体的なコメントとして、以下のようなものがあった。

「調査の基本的な方法や、実際に話者と話して、話者の考え方が分かるようになった」

「自分が調査したいデータをどうやってあつめられるか身につけた」

「講義で方言と言語について面白い話があった。フィールドワークは初めてだったので、白紙から基本を身につけられた」

(原文ママ)

5. おわりに：留学生が日本語方言を研究すること

以上、今学期から新設された研究科目「日本語学研究Ⅱ 日本語学研究（方言）」について報告を行った。アンケートの自由記述から、「人が少なかったので、たくさん勉強できた」「全体的にとっても面白かった」「よく理解できた」等の回答が得られたので、本授業の基本的な方向性は間違っていないものと考えられる。但し、フィールドワークの日程や内容については、改善の余地がある。

母国でも日本でも、日本語の教室で教授されるのは規範とされる「標準語」である。しかし、日本語学習者である彼らは、日本に留学した途端、たくさんの日本語の変種（方言）に晒されることになる。「しっかり日本語を勉強してきたはずなのに、ホストファミリー（関西在住の方が多い）の話が聞き取れない」と言う学生もしばしばいる。私は、混乱しながらも彼らが方言の世界に飛び込む10月から翌年3月の半年間で、方言学の基礎や大阪方言の概要を説明し（「日本語学研究Ⅰ 日本語学入門（方言）」）、方言にも漸く慣れ、方言とは何なのかと考え始める4月から9月までの半年間で、フィールドワークを通じて実際に方言を拾い出し、分析するための指導をする（「日本語学研究Ⅱ 日本語学研究（方言）」）。

方言はその地域の文化であり、方言研究はその地域の人々のことを知る学問でもある。半期間、通してでも1年間という短い期間で教授出来ることは少ないが、本科目を通して身につけたことを、日本語だけでなく、母語や他言語にも応用し、様々な環境で方言研究が出来る人になって欲しいというのが、私の願いであり、目指すところである。

注

1) <http://mafga.or.jp/>

【参考文献】

小林隆／篠崎晃一編（2007）『ガイドブック方言調査』、ひつじ書房

岸江信介／中井精一／鳥谷善史編（2009）『大阪のことば地図』、和泉書院

【謝辞】

長時間にわたる調査にご協力くださった方言話者の皆様に、心より感謝申し上げます。また、本授業を実施するにあたって、企画段階から全面的にご支援くださった箕面市国際交流協会（MAFGA）の河合さま、樋野さまに感謝申し上げます。箕面市小野原生え抜きの高年層という、探すのが難しい話者との接点を作ってくくださった豊川南小地区福祉会会長西岡さまにも大変お世話になりました。ありがとうございました。

本調査にかかわってくださった全ての方に、伏して感謝申し上げます。

(むらた まみ 本センター助教)